棚田学会通信

第67号 目次　2022年6月20発行

地域外住民を主体とする棚田再生活動・・・・・・・・・・2
「大地の芸術祭」による棚田の保全 ・・・・・・・・・・・3
中山間地域ボランティア支援センターを
作った本当の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
「両合棚田」再生への取り組み ・・・・・・・・・・・・・6
「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」の認定について・7
事務局ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

和歌山県紀美野町「中田の棚田」全景

企業による長崎市「大中尾棚田」での田植えの様子

新潟県十日町市松代の棚田と大地の芸術祭作品
「棚田」イリヤ＆エミリア・カバコフ作（撮影：中村 脩）

大分県宇佐市「両合棚田」（撮影：伊藤 高広）

棚田保全のための様々な支援の取り組みについて、４つの現地報告を収録しました。県レベルの話題を除く３つは、いずれも今号で速報的に報じている「つなぐ棚田遺産」に選定された地区です。しかし、これまでの保全活動の道のりは平坦ではなく、増えかけた耕作放棄を何とか解消して現在に至っていることも報告されています。そのために、多くの人々や組織が関わってきたという事実に改めて着目し、深い敬意を表したいと考えます。

（棚田学会編集委員会）

地域外住民を主体とする棚田再生活動

和歌山県紀美野町　まちづくり課　浦　円香

1.「中田の棚田」のこれまでの再生活動の概要

「中田の棚田」は和歌山県北部に位置する紀美野町の南部、ススキの草原で知られる生石高原のふもとにある。農地面積は約 9ha で、かつては 50 世帯が耕作をしていたと言われているが、現在は 3 名の農業者がいるのみで、大半が耕作放棄地となっていた。

こうした状況のなか、新たな町の観光資源として棚田の景観が注目されたのをきっかけに、2019 年、有志による草刈りや雑木の伐採から活動がスタートした。現在では、段が復活し棚田らしい景観が見られ、約 4,000㎡（管理面積の約 10%）で耕作を開始している。そして同年、棚田地域振興法が施行され、全国的にも棚田保全活動への機運が高まるなか、当棚田においても棚田地域の指定を受け、翌年の 2020 年 2 月には「小川地域棚田振興協議会」が設立された。協議会の会員には、棚田地域の農業者、町内の地域活動団体、観光協会、町や県なども参加している。

2. 活動主体の特徴

元来、棚田保全活動団体は地域の農業者を主体として組織されてきたが、本棚田での主たる活動組織は地元住民のほかに、多数の棚田地域外の住民によって組織されている点に特徴がある。

協議会には棚田の農業者も在籍しているものの少人数であり、具体的に活動をけん引する新たなメンバーが必要とされた。そこで、持続可能な農業、空き家の活用や移住者の確保などの視点を交えて、棚田を交流拠点として再生するプランを抱いていた協議会会長が、こうした経験や知識を持つ住民を協議会外からも広く集め「中田の棚田再生プロジェクトチーム」を協議会内に組織した。以降、棚田の再生、交流事業、広報活動、支援者獲得のための営業活動などは、本チームが企画・運営を行っている。

写真 1　再生した田で 3 回目の田植え

本チームのメンバーには、棚田地域の住民に加え、UI ターン者、町内の農業者、非農家の住民、飲食店や宿泊業を営む方、元地域おこし協力隊や大学生などが参加している。棚田の再生や活用に様々な期待を持ち、農業、観光や地域づくりといった視点で、交流活動の企画・実施、SNS を活用した広報活動などに得意分野を生かしながら参加している。

写真 2　新たな仲間づくりを目指して「棚田 deCAMP」

3 年前から耕作を続けている水田の再生では、肥料や農薬を使わない自然栽培を採用し、環境に負荷をかけずに、かつ持続可能な形を目指すことで、自然との共存や環境保全にも取り組んでいる。また、今後は食べ物と健康、安全で安心な食などについて考えられるような食育の場としても棚田を活用する予定である。

UI ターン者のメンバーは、都市住民の農山村や食、ライフスタイルなどに対するニーズに明るく、こうしたニーズを取り入れながらの交流事業や広報活動を得意としている。また、新しく移住してきた方や移住希望者の交流場所にもなりつつあり、活動に新たな人材を結びつける効果も出てきており、交流の拠点として機能し始めている。

一方、地域住民のメンバーは地域情報に精通し、既存の地域団体との連携や、歴史を知る住民や昔ながらの技術を持つ住民と本チームを繋げる役割をしている。2020 年以降、2 名の地域おこし協力隊が活動に加わり、事業の準備・調整、情報の集約や棚田の管理などを行うことで活動拡大に多大な貢献をしている。

活動支援者として、和歌山大学観光学部 LIP（ローカルインターンシップ）の受入れや、登録制ボラン

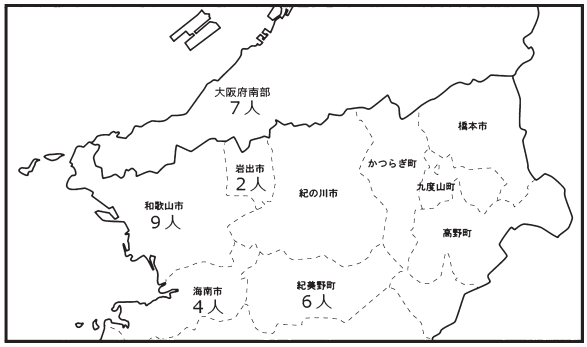

図１　紀美野町と棚田サポーターズ居住地の位置図

ティア「棚田サポーターズ」を設立した。LIP とは、観光学部学生が地域住民と交流を図りながら、地域づくりや観光振興を現場で学ぶことのできるプログラムであり、2020 年度より 15 人程度の学生が活動に参加している。棚田サポーターズの登録者は約 30 人前後で、大半が紀美野町の近隣市町村在住者であるが、大阪府からの参加者も 7 名獲得できた。ほとんどの活動が草刈りであるが、熱心に参加するサポーターも得ることができた。また、再生の過程を交流活動とすることは、人材獲得以外にも、棚田再生の意義を共有することが狙いとなっている。

写真 3 「中田の棚田だより」2021 年 7 月号

3. 課題

一方で、農業経験者がわずかなため、棚田を新たに耕作する人材の確保が喫緊の課題となっている。さらに、地域との関係作りを強化することも急がれる。棚田のある小川地域 5 地区に毎月「棚田だより」を各戸配付し、再生活動の様子やイベントの開催状況を報告してきた。活動周知に大きく貢献し、心待ちにしているとの声も聞かれた。

今後は、地域コミュニティとのつながりを深め、地域情報や活動目的の共有、支援者の確保を目指し、地域に根を張る段階であると考えている。

4. まとめ

「中田の棚田再生プロジェクトチーム」は、棚田を介して地域を発信し、地域内外の住民をつなぐ役目を果たしている。「棚田が人をつなぐ、棚田が時代（とき）をつなぐ」を活動ヴィジョンに、地域の歴史や暮らしが未来に繋がることを、町としても期待している。

「大地の芸術祭」による棚田の保全

NPO 法人・越後妻有里山協働機構　**竹中　想**

「大地の芸術祭」

「大地の芸術祭」は世界最大級の国際芸術祭であり、日本中で開催されている地域芸術祭のパイオニア的存在です。地域活性化を目的として越後妻有の里山で 2000 年から 3 年に 1 回開催されています。昨年の本祭はコロナ禍で延期になり、今年（2022 年）の 4 月 29 日～ 11 月 13 日に開催が決定しました。

大地の芸術祭には以下の 7 つのコンセプトがあります。①人間は自然に内包される、②アートを道しるべに里山を巡る旅、③世代、地域、ジャンルを超えた協働、④あるものを活かし、新しい価値をつくる、⑤ユニークな拠点施設、⑥生活芸術、⑦グローバル / ローカルです。

それぞれのコンセプトについて詳しく知りたい方はホームページをご覧ください。体感していただかないとわからない事も多いので、是非、現地を巡ってみていただきたいと思います。きっと何か発見があるはずです。

大地の芸術祭の拠点施設まつだい「農舞台」

さて、越後妻有地域の中でも、松代地域は特に米作りをしている方が多い地域で、その拠点施設にまつだい「農舞台」があります。

写真１　まつだい「農舞台」概観（撮影：中村 脩）

まつだい「農舞台」は里山を背景に、かかしプロジェクト（大岩オスカール）や米の家（チャン・ユンホ）、「棚田」（イリヤ＆エミリア・カバコフ）など農業をテーマにした作品を含め約 40 の作品が見られるフィールドミュージアムを展開しており、その要所要所の受付を農家や地元の方が手伝ってくれています。地元の方には兼業農家の方が多くて、里山や農作業についてよく知っている方が多くおります。春は山菜取り、代掻き、田植えですが、雪が 3m 程度積もるので、その雪解け水を巧みに利用した作業工程を多く見ることができます。4 月中旬の現在、まだ 1m 以上の積雪があります。

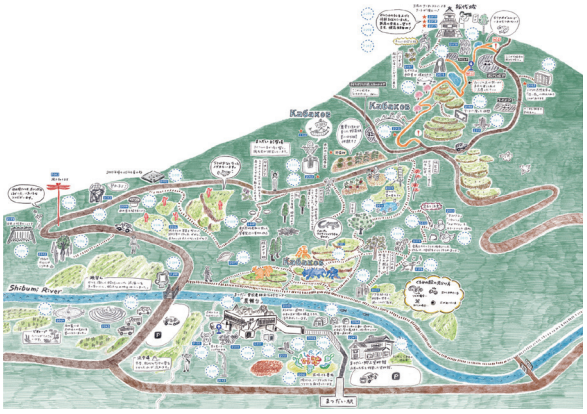

写真２　まつだい「農舞台」フィールドミュージアム地図

まつだい棚田バンクについて

まつだい「農舞台」は棚田の保全活動の拠点施設にもなっており、施設運営のスタッフが実際に棚田の耕作もしています。私自身も 10 年以上前に芸術祭スタッフとして移住し、みようみまねで棚田の耕作を始め、地元農家の方たちから多くを学びました。私が棚田を始めたころはまだ、専門の耕作スタッフがおらず大変でしたが、地元の農家の方は、親切に時に厳しく教えてくれました。最初の 5 年間は農業用語の意味も分からない状況でしたが、だんだん形になるようになり、保全面積も 20a（2003 年の棚田バンク開始年）から、現在では 7.6ha（120 枚）まで増えています。

この棚田の保全には地域の協力ももちろん必要ですが、活動を支えているのは都市や地域外の棚田会員たちです。形態としては棚田トラストに近い形をとっており、まつだい棚田バンクの会員になれば、誰でも棚田の守り手になれます。会員は任意で農作業（田植え・草刈り・稲刈り）に参加でき、収穫後はお米も送られてきます。農作業には地元の農家が講師として参加して、会員へ農作業を伝授してくれます。私も最初は棚田バンクの稲刈りに参加しました（十日町市のふるさと納税の返礼品にもなっています）。

最初は 19 口だった会員も今では 400 口程度まで増え、企業の参加も大きな支えになっていますが、現在も農家数は減り続け、地域の耕作をあきらめざるを得ない状況の勢いは止まりません。

FC 越後妻有について

棚田の現状に直面する中で棚田の農業を生業としながらサッカーをする女子サッカーチーム FC 越後妻有が 2015 年に発足します。都市の女子スポーツ選手が抱える課題と棚田の抱える課題を掛け合わせたプロジェクトで越後妻有の大きな挑戦です。

過疎高齢化により行き詰っている十日町地域の農業ですが、希望を少しでも長くつないでいけるように 12 人の選手と監督が移住し、試行錯誤を繰り返しながら作業とトレーニングの両立を目指しています。4 月 9 日に北信越女子サッカー 2 部リーグの第 1 試合目も見事に勝ってきました。

写真３　FC 越後妻有の選手たち

条件の厳しい場所でどこまで頑張ることが出来るのか、私たちと地域の挑戦は続いています。

まつだい棚田バンク詳細

・標準コース　保全面積 150㎡
　年会費　42,000 円（税別）収穫米約 30kg
・小口コース　保全面積 30㎡
　年会費　12,000 円（税別）収穫米約 6kg
※詳細はまつだい棚田バンクホームページをご確認ください。

中山間地域ボランティア支援センターを作った本当の理由

長崎県五島振興局　農林水産部　農村整備課長
上戸 裕次

2022 年 3 月に「つなぐ棚田遺産」が選定されました。長崎県でも 9 地区が選ばれました。その中で、これまで棚田百選として地域の方々を中心に懸命の保全されていた棚田の名前が 1 か所消えました。覚悟はしていましたが、ここを残したかった…。でも間に合わなかった。

私がまだ 30 代のころ、地すべり対策のために、この棚田のど真ん中の水路をコンクリート三面張りで整備した地区でした。ここが棚田百選に選定されることを聞いた時、驚きと共に、その後訪れ、この水路を見る度にやるせない気分にさせられていた棚田でした。

私が県庁において集落対策に関わった時期は、県の長期計画の見直し時期で、国と同様に農業の「産地対策」と「集落対策」が施策の柱となり、私が属した農山村対策室地域振興班 6 名が県全体の集落対策の中心にならざるを得ない状況でした。その集落対策のひとつとして考えたのが「中山間地域ボランティア支援センター（以下、中山間センター）」でした。

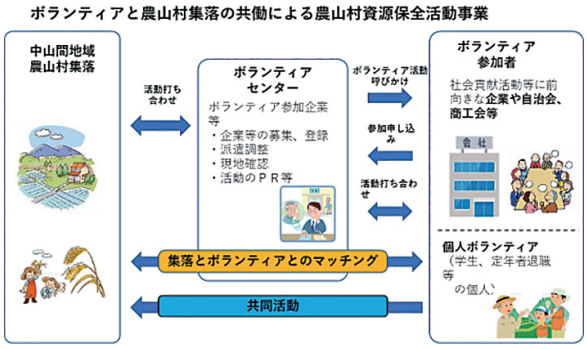

図 1　中山間地域ボランティア支援センターの仕組み

仕組みは、図 1 のように、至って簡単です。「中山間センター」が「農山村集落」と企業や学生等の「ボランティア参加者」とを仲介するというものです。当初は「ふる水・棚田基金」を活用し、県の委託とし、実証を行いますが、将来は集落自らが草刈等の維持活動軽減のため、中山間直接支払交付金の加算等により「中山間センター」に委託します。その結果、集落と参加者との調整の負担軽減が図られ、ボタンの掛け違いのような残念な結果の防止につながるし、集落の維持管理の面でのいろいろなノウハウの蓄積により、「中山間センター」が、指導的立場になることを期待しています。

写真 1　企業による大村市での野岳ため池水路清掃ボランティア活動

ところが、実際は何度後悔したか分かりません。とにかく壁やハードルがあり過ぎる。

1 点目は県庁内。予算獲得において「ボランティアにだれが来るのか。」「中山間センターは、どこが担当するのか。」等、関係部局に対しひたすら質問に答え、資料を整理し、納得してもらいました。

2 点目は、参加者と受け入れ集落探しです。参加者の想定は企業でした。集落は中山間地域直接支払取組集落に絞りました。企業は運良く県の企業景気動向調査に便乗でき、2 割を超す「興味あり」のデータを得、集落側は中山間直払取組全集落にアンケートを実施し、受け入れ希望が 200 集落を超え、逆に上司からプレッシャーをかけられる状況になってしまいました。

3 点目は、「中山間センター」業務を行ってくれる組織が本当にあるかという点です。県庁内での質問にもあった、ここが一番の課題でした。各県事例や県内のボランティア活動を調査し、NPO 法人が入札に参加してくれ立ち上げることができました。

4 点目が現実として、希望集落がいざ実施となるとなかなかこちらの考えを理解してもらえず、企業は新型コロナ感染防止対策のためどの企業も自粛している状況に直面したことでした。

写真２　高校生による東彼杵町での菜の花種まきボランティア活動

それでもスタートして３年目となりました。私も職場が変わりました。この活動の認知には、もうしばらくかかると思いますが、企業だけでなく学校の参加もあり着実に進んでいるようです。

私は農業土木を仕事としている人間です。常々農業の営みが感じられるような感覚を持ち続けながら仕事をしたいと思っています。棚田に関わると、棚田に関わる全てのものが愛おしくなります。田んぼだけではありません。人も緑も空気も水も何もかもです。それが一種の棚田スピリットかと思います。棚田が消えるのを少しでも減らしたい、遅らせたい。そのためには可能な限り何でもやろうと決心した。それが「中山間地域ボランティア支援センター」を作った本当の理由です。

「両合棚田」再生への取り組み

大分県宇佐市　地域おこし協力隊（写真家）
伊藤 高広
明治大学農学部（棚田学会編集委員）
橋口 卓也

大分県北部の宇佐平野を流れる駅館川水系の上流域を流れる滝貞川は、小平川に交わります。その合流地点から 200m 程下流に両合川橋という大正時代に造られた石造アーチ橋があります。この橋の東側が滝貞集落、西側が小平集落で、２つの集落の急斜面に広がる石積みの棚田が「両合棚田」と呼ばれています。両合川橋は自動車は通れない小さな石橋で、路面には緑の芝が生え、周囲の川の両岸の棚田の風景と素晴らしくマッチしています。何とも言えない素朴な雰囲気を醸し出し、全国の他の棚田と比較しても、独特の景観を擁していると言えましょう。

1999 年に棚田百選に選定された時点では、約 7ha、147 枚の棚田がありましたが、その後、未耕作地が徐々に増え、昔の景観を保てなくなってきていました。特に両合川橋のすぐ近くの田にも雑草や灌木が茂る事態となり、かつての景観が失われていることを憂う声があがっていました。

また 2013 年には、国東半島・宇佐地域が世界農業遺産に認定されますが、両合棚田は宇佐市の農業遺産のシンボルとも言える存在であり、地域住民、県や市の関係部署が加わり、2016 年に「両合棚田再生協議会」が発足し、さらに 2017 年からは、地域おこし協力隊員も加わって、棚田の再生事業に取り組んできました。

現在では、約 4ha、120 枚ほどが耕作されています。日頃の管理は、個人で行っていますが、収穫期には共同で作業を行い、はさ掛けの風景もよみがえってきました。今年選定された「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」にも選ばれましたが、ここ数年の棚田再生の取り組みがなければ、選定されるのは難しかったでしょう。

写真１　両合川橋とはさ掛け風景（撮影：伊藤 高広）

両合棚田再生協議会の石井一男会長によると、2019 年に２つの集落の周囲を囲む鳥獣害防止柵を張り巡らせることができたことも、大きな貢献になりました。延長 2km ほどで約１千万円の費用がかかりましたが、地方創生推進交付金の補助で賄うことができました。以前はタケノコも全滅でしたが、柵の内側では再び収穫できるようになり、棚田での耕作意欲も回復してきたそうです。中山間直接支払制度についても、滝貞集落では一旦は取り組みをやめるという事態にもなりましたが、2021 年からは取り組みが再開されています。

活動の拠点が、交流施設「むっからや」（麦で葺いた家、の意）です。空き家を宇佐市が借り入れ、2018 年にリフォームが完成しました。棚田再生協議会が、日常の管理と水光熱費の負担を行っています。ユニークなのは、鍵もかけずに 24 時間誰でも出入りできることです。コロナ禍以前は、別府市の

写真２　両合川橋と「むっからや」（右の銀屋根の建物）（撮影：伊藤 高広）

立命館アジア太平洋大学の留学生達も通ってきて、この施設を利用して、農作業を体験したり交流を行ったりしてきました。

しかし、コロナ禍によって、このような活動は停滞を余儀なくされています。そのよう中でも、継続して開かれている「フォトコンテスト」が棚田を守る人々への大きな励みにもなっています。特に現在の地域おこし協力隊の伊藤は、もともと写真家でもあり、自身で撮影した両合棚田の風景や、そこで作業に勤しむ人々の活き活きとした表情を撮った作品を、交流施設「むっからや」でも展示しています。今後は、コロナ禍で途絶えかけた交流などを復活させ、一人でも多くの応援団を広げていくことが課題です。

写真３　フォトコンテストの周知ポスター

「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」の認定について

「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」
選定委員長・棚田学会会長　**山路 永司**

棚田地域振興法制定から３年が経ち、振興法を核とする各種施策により、棚田保全が進んでいます。棚田百選の選定から 20 余年が経ったこともあり、農水省では令和３年に「ポスト棚田百選（仮称）」を実施することを決め、選定委員会を設置しました。委員は、関係各省庁から推薦された８名でしたが、うち３名は棚田学会の役員等（中島峰広顧問、山本早苗理事、山路永司会長）でした。

まず名称案の公募が行われました。令和３年９月１日から 30 日までという短い期間ながら、473 点の応募がありました。応募案は、未来への継承がイメージされるもの、日本の原風景をイメージさせるもの、親しみやすい文言のものなど、多種多様でした。同年 10 月 28 日開催の第１回委員会ではこれらを絞り込み、意見交換しましたが、結果としては、複数の最終候補の文言をつなぎ合わせる形で決まったのが、新名称「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」です。

同委員会では、選定の趣旨、選定基準、募集要項も審議されました。選定基準は、①積極的な維持・保全の取組がなされていること、②原則として 1/20 以上の棚田が 1ha 以上あること、③地域振興にかかる取組に多様な主体・多世代が参加していること、の３点とされました。

公募期間は令和３年 11 月 15 日から１か月間と短かったのですが、事前に予告されていたこともあり、多数の応募がありました。第２回選定委員会が、令和４年２月 14 日に開催され、提出された推薦書をもとに審査し、271 棚田が選定されました。

そして、令和４年３月 25 日に認定式がオンラインで開催され、金子原二郎農林水産大臣の祝辞、山路選定委員長の講演、牧元幸司農村振興局長の挨拶ののち、各認定地区では記念写真撮影が行われました。

認定地区を県別に見たものが図１です。棚田百選では９道県が認定地区を有しておりませんでしたが、つなぐ棚田遺産では３県に減少し、棚田保全活動の広がりとも言えます。選定基準①に関して、最も力を入れた取組を図２に、取組の具体例を図３に示します。選定基準③に関して、地域振興に参加している主体とその数を図４に示します。多様な主体が多数参加していることがわかります。

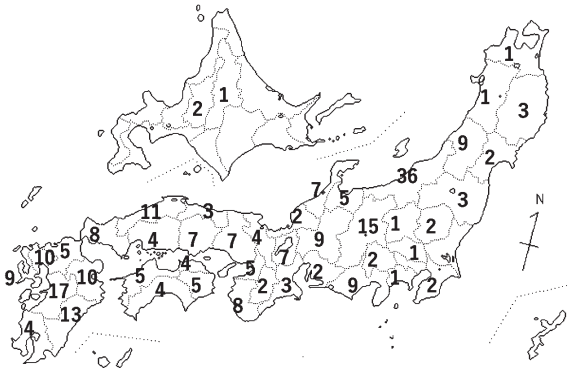

図１　つなぐ棚田遺産県別認定地区数
（北海道は支庁別）

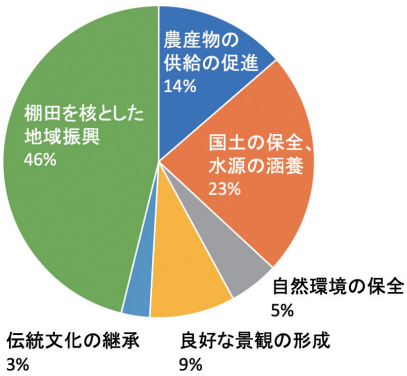

図２　最も力を入れた取組

農産物の供給の促進
- 棚田米のブランド化
- 付加価値を高めた販売
- 棚田地域の特産物のブランド化

国土の保全、水源の涵養
- 棚田の法面や水路の維持・管理
- 棚田の生産基盤の整備
- 自然災害被災時の棚田の復旧

自然環境の保全
- 里地里山の保全
- 生物多様性の確保
- 希少種や絶滅危惧種保護の取組
- ビオトープの形成

注：各取組の中で多い順に記載（13%以上）

良好な景観の形成
- 景観法に基づく景観計画の策定
- 重要文化的景観への選定

伝統文化の承継
- 棚田に由来する地域の伝統行事や祭りの維持・承継

棚田を核とした地域の振興
- イベント等の開催
- 農業体験・環境学習等の教育活動
- 6次産業化の推進
- 棚田オーナー制度
- 学術研究の場の提供
- 農泊
- 企業のCSR活動
- 芸術文化活動の推進
- 農家レストラン

図３　取組の具体例

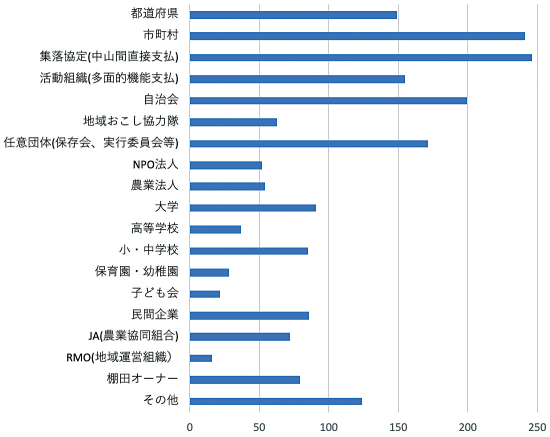

図４　地域振興に参加している主体

このような棚田保全活動が展開されていることは心強いのですが、1999 年の棚田百選認定 134 地区のうち、つなぐ棚田遺産にも認定されたのは 94 地区にとどまりました。各認定地区においては、今後の保全活動の持続性が問われますし、オフィシャルサポーターの一つである棚田学会の貢献も強く求められていると考えております。

事務局ニュース

■ 2022 年棚田学会大会のお知らせ

◇日時：2022 年 8 月 6 日（土）
　　Zoom によるオンライン方式
◇総会、石井進記念棚田学会賞授賞式（10:30 ～ 12:00）
◇棚田学会賞受賞記念講演（12:50 ～ 13:20）
◇大会シンポジウム（13:30 ～ 17:00）
- テーマ：棚田地域で展開されるスマート農業とそれがもたらす未来
- 参加費：無料(事前申込みが必要)会員・非会員共
- 講演者及び報告者
- 基調講演：「棚田を含む中山間農業と農村地域を未来に継承するためのスマート農業の展開」
　遠藤 和子氏（(国研) 農研機構 農村工学研究部門 資源利用研究領域長）
- 事例報告
　①「棚田地域のスマート農業の展開（山都町中山間地域スマート農業実証コンソーシアム）」
　　松添 直隆氏（熊本県立大学環境共生学部教授）
　②「棚田の農業用水路をフル活用するナノ水力発電の実用化に向けて」
　　左村 公氏（(株) 協和コンサルタンツ）
　③「スマート社会実現への推進事業を軸とした未来へ向けた住民意識の醸成」
　　古根川竜夫氏（三重県御浜町役場）

■棚田学会のロゴマークの図案を募集しています。

募集期間：令和 4 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日まで
※募集要項等詳細は棚田学会ホームページをご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

棚田学会通信　第６７号　　2022 年 6 月 20 日発行
発行 / 棚田学会
〒 169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院　高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572　FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakkai@gmail.com